

コンビニ

川崎ゆきお

沼田裕は三十前に田舎へ戻った。都会での夢が破れ、農業を継ぐ決心をした。

家族も村人も喜んだ。

「結婚してからではモドレンからね。ちょっと早いけど尻割ったよ」

「ええんやない。こっちは歓迎や」

裕の同級生で市役所で働いている荘司が言う。

「あっちでは、尻割ったけど、人形劇はまだあきらめてない」

「こっちで人形劇団作ったらええやん。役所も協力するから」

「あっちでこそ素朴な民芸人形劇が必要やったんや。こっちでは必要はないかもな」

裕はおとなしく、ビニールハウスで家業を手伝った。

ある夜のことだ。町からの帰り、裕は明るく輝くものを見た。何だろうと思い、軽ワゴンを止めた。

水田とビニールハウスがあるだけの農道だ。光を発するようなものはないはず。しかし、まぶしくそれは輝いている。

裕はゆっくりと車を進めると、何もない田んぼの中にコンビニを見た。

よくあるコンビニの建物で、光りの正体は店内の照明だった。

この村にはコンビニにはない。

「コンビニ？」

父親は知らないと言う。

「コンビニなんか、いらんやろ。雑貨屋があるやんか」

「そうやなあ」

「やっぱり、町が恋しいか。ここ何もないからなあ」母親が言う。

翌日、裕はその場所を見に行ったが、何もなかった。

ビニールハウスの作業に慣れたころ、また、コンビニを見た。同じ場所だった。

裕は何とも言えない気持ちで、夜道を通り抜けた。

「コンビニ？」

裕は同級生の荘司に話してみた。

「あそこは無理やろ。コンビニが建つわけない」

「それは分かってる。何やろ、あれ」

「裕ちゃんは人形劇やるほどやから、想像力がたくましいから、そういうもん見えるのかもしれない」

「そういうもんか...」

裕は昼間に、コンビニがあった場所まで行った。

畦道にコンビニのビニール袋が落ちていた。中を空っぽだった。

了